高橋五郎『英学実験百話』とその英語学習論
―「英語教育」への概念的胎動 ―

竹　中　龍　範

1．はじめに

わが国における英語教育の歴史を繙いたときに，教授法の研究ということが英語教育に携わる人々の意識にのぼるのはいつごろのことであろうか。本邦近代教育の始まりの時期，すなわち明治時代の前期においては教員養成の制度が未だ整わず，加えて，英語教授法なる概念自体が存在していなかった。制度としての正則・変則は法的規則の上に行われていたものの，方法論としての正則教授法・変則教授法は現代に言う教授法のように体系を備えたものではなかった（竹中，2009，pp.34-35）。学習法にしても然り。明治政府が欧米の教育制度を参考にして，明治５(1872)年に「学制」を定めて頒布し，近代教育制度を始動させるものの，就学率はなかなか伸びず，いわんや，初等教育を終えてさらに中等教育，高等教育に進む者の数はほんの僅かに過ぎなかった。初等教育において英語に触れる機会すらなかった人々も多く，これらの人たちが社会に出んとする過程において，また，職歴を積んでいく中で英語が必要となることもあり，あるいは，自らの教養のために英語を学ばんとした際に，いかなる手段，方法に拠ったのであろうか。中等学校に上がらずとも教師の許に英語を学ぼうとすると何々英語学校といった各種学校等に通うことになろう。間接的な形とはなるが，英語通信教育講座の会員となって学ぶ形もあった[1)]。師が得られない場合には，教科書に準拠して著された独習用参考書である「何々読本独案内」の類を求めて[2)]，あるいは，英学雑誌などを購読して，独りで学習を進めるということが行われた。この後者の場合，すなわち，英語を独習によって学ぼうとする者にとって，それらの独習用参考書や英学雑誌は，英語を教えることを目的とするもので，その学び方を説いたものではなかった。一方，英学雑誌や中等学校生を対象とする『中学世界』,『中学新誌』や『女学世界』などの一般教育誌にあっては，時に著名人や英学者による英語学習歴の回想記を掲載して，読者の参考に供するということが行われることもあった。ただ，そこから有効な学習法を析出するのは読者の責任であった。方法論の視点に立ってメタ・レベルから学習法を説くものが現れるのはいつごろのことであったろうか。

筆者は，これまで，明治期における教授法の開発を英語教育学の前史と位置付け，その考えがいつごろ形成され，いかなる発展の過程を辿ったかについて分析を続けてきた（竹中，2000，2001，2002a，2002b，2013，2014，2015，2017）。本稿は，その方向性を継承しつつも，少しく角度を変えて，竹中（2015）においてその分析・検討は機を改めるとした高橋五郎『英學實驗百話』[3)] を学習論史の視点から分析・

考察し，これを「英語教育」の概念構築の道筋上に位置づけようとするものである。

なお，本書書名については，竹中（2015）の注１に言及したように，表紙には『英語實研百話』と題しつつ，本文冒頭の内題は『英學實驗百話　附 比較世界語論』とし，奥付，及び巻末の有倫堂出版書目では『英語實驗百話』と記して，いずれが正式のものか断じ難いが，本稿では国立国会図書館――以下「国図」と略す――デジタルコレクションに登録の書名に従い，『英學實驗百話』[4] を採る。かつ，以下の記述においては書名，引用等において旧漢字は新字体に改めることとする。

２．高橋五郎『英学実験百話』の分析

2.1 『英学実験百話』の書誌情報

本稿をまとめるに際して参照した『英学実験百話』は，手許に現物がないので国図近代デジタルライブラリー（現同館デジタルコレクション）のものを利用した。判型について国図オンラインの書誌 ID を見ると縦寸が19cm とあり，四六判である。装幀に係る詳細は不明であるが，中扉もなく表紙からすぐに本文に入っていることから，紙装と考えられる。

構成としては，序文や目次等の前付けを欠き，開巻たちまち本文に入る。本文は，全11章から成り，これに附章１章を置いて[5]，全146ページにわたる。後付けは，奥付（i）＋「大売捌」書店一覧（i）＋「有倫堂出版書目」（xv）となっている。奥付には，「明治四十年十月十七日印刷／明治四十年十月　　発行」と記すが，発行月日については，筆書きにて「十月」が「十一月」と改められ，空欄箇所に「一日」と書き加えていて，公式の発行年月日は不明である[6]。その下部に書名が「英語実験百話奥附／定価金三十銭」と与えられ，以下，「著者　高橋五郎／発行者　日高藤兵衛／（印刷者等略）／発行所　日高有倫堂」と列記されている。

目次を欠くものの，各章・節には題目が与えられているので，章番号・ページを補ってここに掲出するが，紙幅の都合により節題は追い込みとする。各章の趣旨については2.3節にまとめることとする。

［第１章］語学研究の三大時期　［1］
一新紀元＝漸やく佳境に入らんとす／三大時期は万事の通則／一個人一社会の三大時期／語学研究無我夢中時代／語学研究半睡時代／語学研究醒覚時代／秩序は分類より生ず／鸚鵡主義の超脱／咀嚼主義に改宗せよ／教員も亦自覚的研究を要す
［第２章］英語学界の革新　［12］
［第３章］外国語学成功の二大要素　［17］
唯夫れ大胆なれ／米人の日本語に成功せる実例／語学は猶ほ游泳術の如し／学生の尻込主義／明治初年の英学生を見よ／退譲は無用なり／大胆小心の四字を心に刻むべし
［第４章］外国語独学法　［26］

［第５章］外国語は如何なる精神を以て学ぶべきか　［31］
先づ虚妄なる楽学の弊を去るべし／語学と精神／明治初年の英語学修／苦学と楽学の成績比較／虚妄なる楽学断じて不可／語学は猶写真術の如き歟／唯解読の明晰を要す
［第６章］外国語研究法博読と精読（博読の新意義）　［42］
「両端を叩いて其中を執れ」／学生の質問／博読可なるか，精読なる可か／大に博読せよ／多趣多端なれ／今日の英学教科書／牛乳のみを嗜む勿れ／食物と肉体精神／博読の新意義
［第７章］何故に日本学生は英語会話に拙き耶　［53］
会話学習の現況如何ん／会話学習の本道／会話熟達の捷径／組織会話と自由会話
［第８章］会話速達の要訣　［60］
組織会話と自由会話／言語の力殆んど万能／能弁は其れ言語の精華歟／外交の成敗も亦能弁の如何に由る／急務は会話教授法の改良
［第９章］音声学（Phonetics）の利害　［70］
自由運動の余地を存せよ／表号語とは何ぞや／言語は活物なり／国文の時義至れる乎哉／漢字の大功徳／仮名の会と羅馬字会／改良綴字とは何物ぞ
［第10章］外国語記憶の心得　［89］
軍隊の気を附ケ！模倣とす可し／教鞭の功能其精神取べし／孫子の練兵法矜式す可し／記憶必訣／学生の頭脳は乾版に彷彿たり
［第11章］記憶法と記憶術　［97］
最近学術的記憶法／記憶力は多趣多般／記憶の写真（撮影）は真に不変色／反復は記憶の要件／人為的記憶術（Mnemonics）／所謂自然式を再論す／孟子の外国語教習論／西洋古今の記憶術／日本の和田守記憶法／詠歌記憶術／応用外国語記憶術
［附　章］世界語　［127］
言語の利害／言語の妙用は鬼神を泣かしむ／言霊の幸はふ国／外国語の巧拙と外交の成敗／基督教と世界語／英語は世界語たるの資格あること／所謂人為的世界語大凡三種ヴヲラプーク，エスペラント，アダムマントング

高橋（1903）が章題を与えつつも，各章は節に分けず，当然，節題も与えられない，或いは，鼇頭注も施さない書き流しの形式を採ったことと比べて，本書における節題は現代に言う reader-friendly なものであったと言えよう。

2.2　本書の成り立ち

本書は，明治40（1907）年10月の発行であるが，実は，附章を含んで全12章にわたる内容のうち６章分については本書発行に先立ち，明治39（1906）年12月から明治40年２月にかけて雑誌『實業之日本』に連載されている。家蔵の同誌２号分（高橋，1906，1907a：下記リスト中にアステリスク添加）を読んだ際にこの連載に気づき，

国図NDLデジタルコレクションにて同誌第８巻（1905）から第10巻（1907）までの目次を検索したところ，次のような掲載状況であった[7)]。

明治39（1906）年
　９巻25号（12月）「外国語は如何なる精神を以て学ぶべきか」pp.40-43
　*９巻26号（12月）「外国語学成功の二大要素」pp.22-25
明治40（1907）年
　*10巻１号（１月）「語学研究の三大時期」pp.46-49
　10巻２号（１月）「外国語研究法　博読と精読」pp.35-38
　10巻３号（２月）「何故に日本学生は英語会話に拙きか」pp.17-19
　10巻４号（２月）「英語会話速達の要訣」pp.49-51

このうち，家蔵２号分と本書の該当章とを比べてみると，一部字句の修正が施され，また，圏点は残すものの，誌上にて施されたルビは全て落とされているという異なりが見られる程度である。章題についても一部改められたものが見られる。

さらに，他の章についても既に発表されたものと重なる内容が含まれる可能性を考え，竹中（2015）に取り上げた『最新英語教習法』（高橋，1903）中の各章と対照してみたところ，次のような対応が確認できた。

『最新英語教習法』		『英学実験百話』
第四章　所謂音声学（発音学）果して必要なる乎	→	［第９章］音声学（Phonetics）の利害
第五章　最近心理学的実験記憶法汎論 第六章　問題承前　特に注意及び各種の興味を評論す 第七章　特別応用言語記憶法　余輩の記憶法と従来の記憶術 第八章　問題承前　小児大人記憶作用の差別及び特色併て和田守記憶術を評す		［第11章］記憶法と記憶術
第三章　世界語の必要及び英語の世界語たるべき所以	→	［附　章］世界語

ただし，その転載は，高橋（1903）から同字同文にて部分部分を採り，これに新たな記述を少しばかり補う形で行われており，前者の割合が第９，11章においてはそれぞれ95％を超えている。また，第11章の転載元が原著第５章から第８章――第９章も記憶法関係ながら，殆ど採られていない――に及ぶ77ページの原文から摘記が行われているが，これは原著における記述が冗長で，例示も過分なため，適宜省略を行ったものであろう。あるいは，他の章との分量的均衡を考えての縮減とも考

え得る。附章における転載の比率は低く，書き下ろしが多くを占める。

さらに，その他の章においても，例えば，第４章「外国語独学法」においては高橋（1903）に見られる主張とその趣意を同じくする記述が見られる。同字同文を引くものではないが，下記に対照したような関係である。

『最新英語教習法』	『英学実験百話』
独学は初より多少の思慮を要す，多少自国の語に通暁しをるを要す，独学は殊に最初に在りては重に比較より来る者とす，比較すべき材料の多少我が胸臆に既に存在するを要す，故に十二三歳以下の小児は実は独学独修を為すを得ざる者とす，自国の文法を多少知らずして焉んぞ外国の文法を解するを得んや，（p.348）	然らば独学は如何して可ならん（中略）殊に独学は初より多少の思慮を要すれば，幼稚の児童に之を望む可らず，才智の夙に開けたる児童を除くの外は，十二三歳以上に非ざれば，独学自修を為す能はず，是れ外国語の独学は我を推して彼に及ぼすより学び得らるゝ者なれば也。（p.28）

こうして成った本書は，英語学習（法）を論じるにあたり，どのような主張を展開しているのであろうか。

2.3　本書刊行の意図と各章の趣旨

序文，もしくはこれに当たるものがないことで，本書刊行の意図は明らかにし難いが，本書における主張と，本書に先立って発行された『新式英語熟達法』（高橋，1907b）の巻頭「英語熟達法序論」において述べられている内容とに共通点が見られるので，或いは，この両書は，高橋（1907c）にて英語学習法を説き，それを実地に応用して英語を学ぶための参考書として高橋（1907b）が著された，いわば姉妹書とも呼ぶべきものではなかったかとも読み取れる。発行所が異なっていることからその可能性は低いと考えることもできるが，高橋（1907b）が實業之日本社，高橋（1907c）が日高有倫堂と異なるものの，その間に本書全12章の半分にあたる６章分が『實業之日本』誌に連載されたものであったことを考えると，これを接点として両書を関連付ける可能性も強ち否定し得ないのではないか。この仮説に立って，高橋（1907b）の序文に高橋（1907c）に通じる刊行の意図，ねらいを探ってみたい。長くなるが，今ここに関連の箇所を引いてみる（高橋，1907b，pp.1-5）。

> 按ずるに，主義或は秩序は，如何に不完全なりとも，無主義或は無秩序に愈るや多大なる者ある可し，豈徒に已むに愈るの類のみならんや，請ふ嘗試みに聊か之を言はん，意ふに，語学は其れ猶亦撮影術の如きか［仏人写真家ダゲルが「先づ一箇の花をして其影像をヨヂム版に映蝕せしむるの道を学べるや，悠然進んで百千万の物象を映蝕せしむ」るが如く――引用者注］。（中略）
> 外国語を学ぶも（中略）一文一書を真に善く解読し得ん歟，他の百文千書は自然と手に随がひて解読せられんとす，決して其解読する書や文の多きを要せず，多

少は措て問はじ，只解読の明晰ならんことを要する而已。

今の語学者の弊は其学課の曖昧にして明晰ならざるに在りとす，日々に一章を学び，月に一冊を習ふと，只管進度の多きを誇り楽むと雖ども，其所謂学習なる者は，譬へば度の違へる写真の如く，朦朧として分明ならず，雲か山か曖昧渺漠として，恰も影の捕捉す可からざるが如し，是れ全たく英文（中略）を習ふことの精密周到ならざるの過に坐す也，若し其学び習ふ所にして渺昧模糊たらんには，幾く度裘葛を易ふとも，進歩は終に観るべき者なからんとす，之に反して，一たび其学ぶ所明晰精細ならんには，一頁の活用能く一冊を掌上に弄せしむる真に易々たる者ある可し，（中略）然らば語学の研究も，其研究を確実にして歩を進めざる可らず，（中略）

ダゲル（中略）は無数の草木禽獣を一々に撮影することを学びしに非ず，只（例へば）一輪の薔薇花を写さんことを習へり，然れども，一輪の薔薇花既に巧妙の手際もて撮影されたらんには，自余の百花は牡丹芍薬も梅桜も皆同じく容易に撮影せられ得べし，只応用のみ，活用のみ。

少なくとも，遅くとも，余輩は英語が中学の四年よりして斯の如く合理的に（rationally）に研究せられんことを希望す，如何となれば，古人の言ひし如く，心裏に真に理会せられたる件独り能く判然と記憶せらる可ければ也，此点に於ても亦語学は写真術に彷彿たる者あるを見ん，学生諸子にして若し一頁を，或は一章を，此の主義にて研究したらんには，基礎既に確立したれば，必ずや其応用の驚くべき者ある可し。

善し，然らば其合理的学習法とは果して如何すべき者なるや，曰く，是れ学生をして凡て其外国語の領会に必要なる点々を悉く会得せしめ，八面玲瓏水晶の如く些しの曇なからしむるに在るなり。

本書が期する所，試みたる所も亦，此精神を体し，此の主義を応用したる而已，

ここには高橋（1907c）への直接的言及はなされていないが，上掲引用箇所に止まらず，中略箇所についても共通の主張が多くみられ，この高橋（1907b）にては具体的に英語の学習にいざないつつ，その学習に係る理念については高橋（1907c）において詳述するとの構想であると読み取れる。なお，高橋（1907b）の本文は，文字・発音より始めて，語彙，文法に説き及び，その応用として訳解例題を提供するものでありつつ，要所要所に，例えば「外国語記憶の心得」（pp.48-50）など，メタレベルの解説を与えるという構成をとっている。その内容・構成は，規模こそ異なるが，大塚（1962）や長井・伊藤（1987）などを彷彿とさせる英語参考書である。

高橋（1907b）及び高橋（1907c）の関係をこのように理解しつつ，ここで高橋（1907c）における各章の趣旨をおさえておきたい。2.1節において通覧した各章の章題，ならびに節題から大凡のところは読み取り得るが，直接引用を交えつつ，それぞれ要点をまとめることとする。附章の「世界語」についてはこれを省く。

［第１章］語学研究の三大時期

およそ事物の発達・発展は三大時期に分けられることが多く，一個人の成長においても，無意識的時代（誕生～10歳位），半意識的時代（10～20歳位），それ以降の全意識的時代に分けられる。わが国の語学研究も同様に，幕末より明治20（1887）年までの「語学研究無我夢中時代」――この期における無意識的学習は「造詣の甚だ浅き者と謂はざる可らず」――，それより明治39（1906）年に至る「語学研究半睡時代」――「語学研究は無心の境を越えて有心理解の境に進み入り」はしたものの，「往々原理の光渙発したるありと雖ども，発して未だ其的に達せず，或は的に達して未だ正鵠を得ず」との状態であった――，そして［本書刊行の］明治40（1907）年を期して「語学研究醒覚時代」が到来し，辞書や文法書は分類・秩序による充実発展を見せて，以前の「単に専ら模倣を維れ事とする」「鸚鵡主義」を脱し，「衆学生をして悉く自覚的に外国語を習はしむ可」く，「咀嚼主義に改宗」せしめ，「教員の側に於ても亦自覚的研究を積」む時代になって来よう[8)]。

［第２章］英語学界の革新

明治初年の英文を意味不明なる日本語に直訳的に置き換える野蛮的解読法は淘汰され，「自覚的に英書を読み，自覚的に英語を話さんとする好趨勢は年を経て盛んなる有様となりし」は喜ぶべきである。「其教習する所をして愈よ分解的綜合法（analytico-synthetical methods）に率由せしめられんことを祈る而已，分解的と綜合的とは其性質一見相容れざる如き者なれども，［これを］程よく折衷調和する，是れ真正の教習法なり」，今こそこれを英学研究に扶植する好時機である。

［第３章］外国語学成功の二大要素

語学において大胆であることは成功の秘訣である。幕末に来日した米国宣教師バラ氏が，僅か７，８箇月の日本語学習の後に早くも日本語による説教を始め，また，明治初年の英学生が不完全な学習環境の下にも大胆に構え，教場にては外国講師に臆面なく会話を試み，学生間にても始終英語にて談話したることなどがその好例である。教室にては退譲は無用である。但し，それと共に小心も求められ，「大胆にして行なひ，小心にして考ふるを最も必要の手段方法とす」。

［第４章］外国語独学法

外国語を師について学ぶこととこれを独習することとは，それぞれ一長一短があるが，独学の場合，初めより多少の思慮を要するため，幼稚の児童にはこれは求め難く，12，3歳以上に非ざれば独学自修をすることはできない。独学をするには大決心が必要で，また，反復習熟のために忍耐が求められ，この両方をもったうえ，一日の課業としては量よりも理解の精しきを以て尺度とすることが大切である。その上で，精読とともに博読をも心懸けるべきである。

［第５章］外国語は如何なる精神を以て学ぶべきか

明治の初め，英学徒は辞書・文法書等の完備せざる中にあって，一応は英語を普通に使う程度には習熟したが，今日は条件が整ったものの，学生の実力は格段に劣っている。これは，児童心理研究の結果，楽学が持て囃され，教材なども易

しくなったためである。また，語学は写真術と同じように，「今の語学者の弊は其学課の曖昧にして明晰ならざるに在り」，進度の速いことばかりを誇り，楽しんでいるが，これでは焦点のずれた写真に同じい。また，中国の永字八法の如く「演繹的に習はず，却って帰納的に学ぶ」と同様に，外国語学習の場合もまず原理を分析的に学び，後これを応用するように習得するがよい。「余輩は英語が中学の四年よりして亦斯の如く合理的に（rationally）研究せられんことを希望す」。

［第６章］外国語研究法博読と精読（博読の新意義）

精読は屡ば主張せられ，称讃せられたれども，「精読を以て名を成したる人々も実は博読を以て之を得たる者と謂はざる可らず」。明治の初期は，普通学は大半が原語により，原書について学び修めざるを得なかったため，学生は自然に多趣多端となり，博きに亘って読んだものである。精読はそれ自身としては善きものであるが，他日世間に乗り出さん時には博く社会万般の事について予め学びおけば，その修養の効果は量り知れず，故に博読を以てわが良師とすべきである。

［第７章］何故に日本学生は英語会話に拙き耶

かつて日本人が中国語に接した際に，一部の例外を除き，これを音声を通じて正則に習得した者などはなく，今や世界語たる英語の学習においてはこの二の舞を踏むの愚は犯してはならぬ。ただ，この会話力習得のためには，その言語が用いられている国に行き，そこで自然な環境下にこれを習得するのが成功法であろうが，これは財政上不可であるとともに，倫理上にも国民教育を施すべき幼少の時代にこのようなことを為すは不適である。ただ，自国の環境下，学校の教場において英語を学ばしめると，それは日々日本語化し，遂に日本的英語 Japanese English になってしまうので，「先づ英語の最も有用普通なる慣用語法，即ち idiomatic phrases or sentences を選択し，順次学生をして之を諳記せしむる」こととし，組織会話 systematic conversation と自由会話 free conversation とを程よく合わせて指導するようにすべきである。

［第８章］会話速達の要訣

日本人は外国語に流暢ならざるがために，ややもすれば外国人と談論することを避けんとすることが多いが，能弁こそ外国語の精華とすべきものである。したがって，会話の教授法を改良することこそ今日の急務であり，そのためには，先述の組織会話と自由会話のうち，まずは「抑も一国の語には一国の語法あり，先づ之を教へざれば事に臨んで口を啓くに由なし」との点を弁えて，組織会話より始めることを要す。それぞれの場面にて用いられる英語表現について，おおよその形式を教え授け，英語の慣用法を知らしむるを最大急務とすべきである。こうして日常必要の英語に習熟せしめて後に「須らく時々自由会話を交へて千変万化の活用を図る」べきである。但し，この自由会話は未熟のデタラメ，乱暴会話ではならず，組織会話の活用的練習をなさしめるものでなければならない。

［第９章］音声学（Phonetics）の利害

今や世界語たる英語には，無数の土着音的英語が見られるが，これらは大同して世界的英語をなしている。然るに，西洋には音声学者という一種の語学者があっ

て，この区々なる「小異にまでも非常の重きを置き，百方工夫して其微別を悉とく写し出さんことを務め」おるが，これは愚かなる企図である。言語は活物であり，綴字法，発音ともにこれまで変遷し来るが故に奇怪なる綴字，発音をみるのは当然のことである。綴字については綴字改良論者がこれを単純化しようとしているが，わが国字・国語についてのローマ字論者，仮名文字論者に同じく，その主張は「心理学上失敗せざる可らざるの原因を有す」と言わざるを得ない。

［第10章］外国語記憶の心得

外国語を学ぶにあたり記憶は重要である。しかし，その困難たるや，これに費やしたる時間と経費とを容易に無にするものであるが，その一因として不注意がある。「語学生も（中略）其外国語を学習するに当りて注意を喚起し，その精神を一事に専らにするを得ば，必ずや其効果の倍蓰する者ある可し」。

［第11章］記憶法と記憶術

「普通記憶法上に於て第一の要件とする所は注意其物」であり，「語学には直接には記憶力の関係絶大なる者あるが如し」。これは，解剖学，生理学の上からは記憶に対応する神経中枢の働きと大いなる関係を有し「記憶は単に一機関に係るに非ず，一群の機関に係りて存す」と言える。この記憶の作用を有効ならしめるのは注意である。且つ，記憶がその働きを最大限にするには反復の効用も大きい。然るに，この記憶を増進すべく古来より様々な人為的記憶術が提唱されてきたが，このような人為的で，不自然なる記憶術は，其害たる却って利よりも甚だ多からんとす。ここにはカントが区別した機械的記憶，弁別的記憶，技巧的記憶を挙げ，「此等三種の方法を随時随宜，臨機応変に錯綜行用する，之を最上乗の記憶法と」し，その第一の要件は注意＋興味であることを記しておく。

前節2.2に見たように，この一部は高橋（1903）における主張を移したものであり，書名に「教習法」の語を用いて，「教」と「習」，すなわち，教授と学習の両側面に説き及んでいた[9]ものから学習に係る章を分離した形になっている。これに新たに『實業之日本』誌に発表した記事が転載され，さらに書き下ろしの短い章が加えられた構成となり，ここに高橋の英語学習論がまとめられたと解釈できる。

もちろん，これを以て包括的，あるいは体系的とすることには慎重であらねばならない。しかし，現今にあっても，例えば，動機付けや学習の型（視覚型，聴覚型，運動型），発達年齢などを挙げて，これこれの領域を含めば包括的であると規定することは困難である。高橋の主張には現代の視点からは妥当性，適切性において問題とすべき箇所も少なくない。しかし，これは現代の基準に立った評価であり，本書刊行の明治40（1907）年に基準点を移して，これを英語教育発達史の視点からその位置付けを行うことが必要である。

３．英語教授と英語学習――「英語教育」の概念構築と高橋五郎

わが国の英語教育が形を成すに至ったのはいつごろのことであろうか。英語を教え，学ぶという営為を以て英語教育と呼ぶのであれば，それは文化５（1808）年の

フェートン号事件を受けて，翌年，幕府が蘭通詞宛て発した英魯語兼学の命による英語の教授・学習がその始まりということになる。この後，わが国は開国・維新の騒擾を経て近代を迎えるが，明治政府は西洋の制に倣って国民皆学を旨とする教育政策をとり，改革を推し進めた。その学校教育の課程中に英語は常に一定の地歩を占め，太平洋戦争中にあっても中学校の英語は時間削減を受けこそすれ，姿を消すことはなかった。この200年を超える英語教育の歴史に方法論の視点から切り込もうとすると，果たして方法という観念がいつごろから見られるのであろうか。「１．はじめに」にて触れたように，筆者は長らくこのテーマに取り組み，主として教授法の側面からさまざまな著者による主張を，主としてその著書の内容，及び刊行当時の評価等を分析することを通して概観してきた。取り上げたものの中には，教授法よりは学習法に重きの置かれたものもあったが（竹中，2000，2017），ここに取り上げた高橋（1907c）を定置しようとすると，教授法史・教授論史とは別して学習法史・学習論史を範疇化することが必要かと考えた[10)]。特に明治期の英語教育を分析するに際しては，学校教育の枠組み内において行われた英語の教授・学習に対し，上級学校に進むことができなかった人々が取り組んだ独習・独学という形態にも十分に配慮することが必要で，学習法史・学習論史を独立に設定することが自ずと求められ，ここに立脚点を置くこととしたい。

英語教育という現象は，そこに展開される活動という点からこれを見ると，英語教授と英語学習という２つの側面から捉えることができる（小日向，1938，p.1）。

> 教育と云ふのは教育者から被教育者への精神的・智的な伝達作用である。これを教育者の側から云へば教授であり被教育者の立場から見れば学習である。今英語教育に就いて之を考へるに，英語教師が生徒に英語の知識を伝達するのが英語教授であり，また反面から見て英語を学ばんとする者が教師に就いて（又は書籍などを便りとして）英語の知識を習得することが英語学［習］である。かく考へて来ると英語教育論は英語教授論と英語学習論と云ふ二つの見地を包含するものである。但しこの両者はどこまでも見地の相違であつて，英語教育そのものに二つの種類があるのではない。教授と学習の一如の境地――即ち教育者（教師）と被教育者（生徒）との智的抱擁の世界――は常に一つである。
>
> 英語と云ふ知識の世界で教師と生徒との精神的抱合があつてそこに円滑な英語教育が生れて行くのである。（中略）そこに英語教育の方法論が必要となつて来る。教師の側からは英語教授法が，生徒の側からは英語学習法が考へられることになる。

このように英語を教え・学ぶ現象を「英語教授」と「英語学習」とに分け，且つ，それを別個のものとするのではなく，一如の境地の下に捉えようとする「英語教育」という概念は，２世紀にわたるわが国英語教育の最初から存在したわけではない。幕末から明治初年，同前期にかけて行われた英語の教授・学習は，実学としての英語，英学のそれであって，英語で書かれたものの内容さえ理解できればよい，その

ためには英語自体は発音が犠牲になっても，話したり，書いたりすることなどはできなくともよい，とするもので，一言語としての英語をいかに教えるべきか，どのように学ぶべきかについての観念は存在しなかったと言ってよい。ところが，欧米先進国の文明を移入することが進むと，それまで日本語に存在しなかった概念が積極的に漢語訳され，英仏語に頼らずとも文明開化を推し進めることができるようになって，勢い，英語は実学を支える必要がなくなり，学校教育課程中の一教科目へと変貌をとげ，その教授成果が問われるようになってくる。こうした状況変化の中に必然的に求められたのが，どのように教えれば効率的，効果的に期待した成果が得られるかをめぐる教授法開発の考えであった。

と同時に，この趨勢の中にあって，「教授」とは車の両輪をなす「学習」に意識を向けた著作が世に問われることともなり，中には教材作成に際してそれに意を配る著者も現れてくる。その一例として，明治の中期，小学生に向けて著された入門レベルのスウィントン読本独習用参考書『会話体スウイントン氏初学入門及第一読本独案内』（阿閉政太郎訳，1887）の場合を挙げてみたい（竹中，2021）。本訳書では，当時，独案内と称する訓読直訳式参考書が数多く刊行されていた中にあって，高い認知的負荷をかけるこの方式によらず，児童が日常になじんでいる会話体を採っているが，これは，

> この年齢の子どもにとって，訓読直訳式の理解は，認知的活動を求めるもので，却って困難であったのではないか。漢文を学んで訓点による返り読みに未だなじんでいない児童にとっては，日英語間での語順の異なりを観念的に理解し，そこに示された訳順にしたがって分析的に英文を理解することは甚だ難行であったろう。それよりは英文をかたまりによって捉え，それに対応する日本語を求めるほうが理解を促進すると考えたとも推測し得る。（竹中，2021，p.16）

と分析されるように，児童の発達を踏まえたうえで，それを教材開発に生かしたと解釈し得る事例である。

このような過程を経て「英語教授」と「英語学習」とが融合し，「英語教育」の概念形成に至ることになるが，これは明治末年のこととなる。すなわち，岡倉由三郎の『英語教育』が世に問われた明治44（1911）年を以て「英語教育」なる用語・概念が創出されたとする理解が一般的に行われているところである。しかしながら，これについて同書を見てみると，その「はしがき」冒頭に「『英語教育』と云ふ題の下に，外国語，特に英語の教授と学習とに関する卑見を公にする事に就いて云々」（岡倉，1911，p.i）とあり，また，

> 現今では種々の原因から，教育学とか教授法とかいふ詞に，一種神秘的の霞が掛かつて居て，其れが恰も教授上又は教育上の秘訣とか妙案とかを示すものゝ如くに感ぜられる傾がある。従て自分が「英語教育」といふ題の下に，英語の教授に関して説述すると聴いて，左なくとも語学教授の不成績の非難せらるゝ今日，

一部の人達は，或は如何なる専門的の知識が述べ立てられることかと，刮目一番せられるかも知れぬ。が，遺憾乍ら自分の是から述べようと思ふ所は決して左様のものでは無い。（岡倉，1911，pp.1-2；下線引用者）

英語の学級組織の教授法を吟味するに先だち，一応此の独修の問題を解決するが順序でもあり，殊に前に述べたる如く，英語教師の側ばかりで無く，英語の研究者［学習者－引用者注］の側に立ても，学修の方法を述べるのが，此の小冊子の目的であるから，（後略）（岡倉，1911，p.5）

との言述が見られるばかりで，従前用いられてきた「英語教授」と，ここに新しく用いる「英語教育」とが概念においていかに異なるかについて述べるところは見られない。上掲引用のうち後の方に見られるところからすると，英語教授と英語学習とを包括するものが英語教育であるとの理解が読み取れるやも知れぬ。しかし，本書にて扱われている学習に係る問題は，「二　英語は独習し得べきか」と「三　英語教授を始むる時期」との２章のみであること，その初期の著作である岡倉（1894）においてもすでに「外国語を始むべき時期」の節を含んでいながら，その書名には「外国語教授」の語を採っていることを考えると，岡倉が「英語教授」に対して「英語教育」の語を用いて表そうとした概念がいかなるものであるかは明確には把握し難いと言わざるを得ない。岡倉（1911）がその書名に「英語教育」なる用語を用いつつも，この時点ではまだその概念が十分に分明していなかったのではないか，とも考え得よう。少なくとも岡倉（1911）においては「英語教育」の概念規定は明示的にはなされていない。

このような形で「英語教授」から「英語教育」へとの概念的遷移を通観すると，高橋（1903）がその書名に「教習」の語を用い，教授と学習の両面にわたって論じたうち，学習論に係る要因を摘出して，さらにこれに洩れた学習要因を論じ合わせて本書高橋（1907c）が成ったと解釈され，英語学習論を体系づけようとする試みであったと解釈し得る。もちろん，それは，現代に行われる学習論の体系とは異なったものであろうが，英語教授論と対峙しながらも，それと融合して「英語教育論」を構成するものとしての体系である。少なくとも，その指向性を持った英語学習論であったと考える。高橋の博覧強記はほとんどが独学独修により身につけたものであり，それからくる自信によるものか，彼の論ずるところには往々特異なものがあり，独善が見られると評されるが，これは高橋（1903），高橋（1907c）についても言われるところである――前者についての磯辺弥一郎の評は竹中（2015，p.8）を見られたい。しかしながら，明治後半期をかけて到達することとなる「英語教育」概念構築の道程に，この両書は然るべく位置づけられるものと評価したい。

４．おわりに

学生時代に，英語を教えることを「英語教育」と呼ぶのは日本独特のものであって，これを English education と訳しても，それはイングランドの教育という意味

にしかならない，さらに，この「英語教育」という用語は岡倉由三郎が使い始めたもので，それ以前は「英語教授」という言い方しかなかったというようなことを聞いて以来，長らくその通説のとおりに思い込んでいた。しかし，史的研究を進める中で，用語と概念との対応関係をはじめ，通説を再検討してみると，かみ合わない論理が見えてきたり，繋がらない論点が明らかになってきたりした。そのような問題意識につながったきっかけの一つが高橋五郎による『最新英語教習法』と『英学実験百話』という２つの著書の存在であった。前者は早くに読む機会があったが，後者は国図近代デジタルライブラリにデジタル公開されるまでは読むこともなかったので，両書がいかなる関係にあるのか，考えたことがなかった。これが気になり出したのは前者を取り上げて竹中（2015）を発表した時であった。両書をまとめて取り上げては１本の論文として上すべりのものになると考え，後者は別稿に譲るとしたのであるが，今ようやくその宿題を終えることができた。

教授活動が即ち教授法であった明治前期からその後期にはメタ・レベルにおいて教授法が捉えられるようになり，やがては英国から H. E. Palmer を迎えて英語教授法の開発が進められた。現在，この Palmer を応用言語学研究の魁とする再評価がなされているが，その流れの先に現在の英語教育学研究が展開している。もちろん，英語を教え・学ぶという活動も脈々と続けられている。しかし，過去に属する部分はすでに記録から消えてしまった部分もあって，現在がいかなる過去の上に存在しているか不明なところも少なくない。引き続きこれに光を当てていきたい。

注

１）英語の通信教育については，江利川（2010）がその歴史を概観している。

２）英語読本独習書による学習を分析したものとして，馬本勉が馬本（2010）から馬本（2018）に至って対象読本を異にした研究を続けており，その分析の規準は馬本（2015）にまとめられている。

３）本書の著者高橋五郎については，その略歴・業績を，主として平井・高岸（1974）に拠りつつ，国図近代デジタルライブラリーなどをも参照して竹中（2015, pp.1-4）にまとめたので，これを参照していただきたい。

４）書名中の「実験」についても竹中（2015）の注１に触れたが，「実際の経験，実体験」との意味であり，experiment の意ではない。

５）この附章について，大村他（1980，p.38）は「「附比較世界語論」はない。」とするが，これは本文冒頭の内題に「英学実験百話／附　比較世界語論」としながら，127 ～ 146ページの最終章が「世界語」と題されて章題を異にするため，これを欠くと判断したものと思われる。

６）大村他（1980）は，発行年月を「1907〈明治40〉．10.」とするが，恐らく市販流通本では10月幾日かが刷り込まれているのであろう。

７）平井・高岸（1974, pp.255-283）を収載する「近代文学研究叢書」において，「二，著作年表」の節は，取り上げた人物の業績について細大漏らさず拾い上げる方針となっているようであるが，この『實業之日本』に掲載された高橋の記事６

本については調査漏れとなっている。

8）この高橋による本邦語学研究の三大時期区分について，大村他（1980，p.38）は「語学研究の時代区分については現在の時点からは承認できないと思われる」とするが，筆者は，実学としての英語・英学の時代から教科目英語へと遷移するのが明治19（1886）年に発された諸学校令のあたりからであり（竹中，2009，p.36），この次の節目となる本書刊行の時期（1907）あたりには，明治期英語教育論の集大成とされる岡倉由三郎『英語教育』（1911），英語辞書発達史上に期を画した入江祝衛『詳解英和辞典』（1912）（Cf. 町田，1981），近代的な英文法・英語学研究の魁たる市河三喜『英文法研究』（1912）と，英語各界にその後の方向性を決定づける瞠目すべき出版が続いたことを考え合わせると，この高橋の時期区分は，結果的に概ね妥当な区分であったと考える。

9）この点については松村（1997，pp.214-215）も注目するところである。

10）赤祖父（1938）は，第Ⅳ章に「教授法」を立て，その下に置く「教授法各論」の一つに「学習法」を挙げ，学習法を教授法の下位範疇とする。なお，ここにはマーセル著・吉田直太郎訳『外国語研究法』（1887），井上哲次郎・和田垣謙三『外国語研究要論』（1891），内村鑑三『外国語の研究』（1899）等が取り上げられているものの，本書高橋（1907c）は挙げられていない。

参考文献

赤祖父茂徳編（1938）『英語教授法書誌』東京：英語教授研究所.

馬本勉（2010）「明治期における英語読本独習書の研究――森修一の独案内に見る英語学習の諸相――」『日本英語教育史研究』第25号，pp.89-111．日本英語教育史学会.

_____（2015）「独習書の分析を通じた英語学習法の変遷に関する研究」科学研究費助成事業研究成果報告書，2020年９月19日検索　https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-24520637/

_____（2018）「ウィルソン第一読本独習書に関する研究」西岡宣明・福田稔・松瀬憲司・長谷信夫・緒方隆文・橋本美喜男編『ことばを編む』pp.296-306．東京：開拓社.

江利川春雄（2010）「英語通信教育の歴史（1）――史的概観と研究社英語通信講座――」『日本英語教育史研究』第25号，pp.113-135．日本英語教育史学会.

大塚高信編（1962）『英語百科小事典』東京：池田書店.

大村喜吉・高梨健吉・出来成訓編（1980）『英語教育史資料５　英語教育事典・年表』東京：東京法令出版.

岡倉由三郎（1894）『外国語教授新論　附国語漢文の教授要項』『教育時論』第338号附録．東京：開発社．2016年10月５日参照　国立国会図書館近代デジタルライブラリ.

_____（1911）『英語教育』東京：博文館.

小日向定次郎（1938）『英語教育論――英語教師の教養に就いて』東京：英語英文

学講座刊行会.
高橋五郎（1903）『最新英語教習法　一名　外国語新記憶法』東京：東文堂.
_____（1906）「外国語学成功の二大要素」『實業之日本』第９巻第26号，pp.22-25．實業之日本社.
_____（1907a）「語学研究の三大時期〔一新紀元＝漸やく佳境に入らんとす〕」『實業之日本』第10巻第１号，pp.46-49．實業之日本社.
_____（1907b）『新式英語熟達法』東京：實業之日本社.
_____（1907c）『英学実験百話』東京：日高有倫堂．2016年10月５日参照　国立国会図書館近代デジタルライブラリ.
竹中龍範（2000）「Claude Marcel の著書と吉田直太郎譯『外國語研究法』をめぐって」『四国英語教育学会紀要』第20号，pp.1-10．四国英語教育学会.
_____（2001）「佐藤顕理とその『英語研究法』」『言語表現研究』第17号，pp.63-73．兵庫教育大学言語表現学会.
_____（2002a）「松島剛とその英語教育論」『英語――研究と教育（稲冨健一郎先生退官記念論文集）』pp.71-82．高松：稲冨健一郎先生退官記念事業会.
_____（2002b）「新教授法の紹介とW・フィエター――フィエターはどこに？――」『英學史論叢』第５号，pp.9-16．日本英学史学会中国・四国支部.
_____（2009）「瞥見　日本の英語教育200年」第35回全国英語教育学会鳥取研究大会実行委員会編『第35回全国英語教育学会鳥取研究大会発表予稿集』pp.29-36．全国英語教育学会.
_____（2013）「崎山元吉『外国語教授法改良説』をめぐって」『言語表現研究』第29号，pp.1-11．兵庫教育大学言語表現学会.
_____（2014）「重野健造『英語教授法改良案』をめぐって」『英語教育学研究』第５号，pp.21-30．広島大学英語教育学会.
_____（2015）「高橋五郎『最新英語教習法』をめぐって」『言語表現研究』第31号，pp.1-12．兵庫教育大学言語表現学会.
_____（2017）「『外国語研究要論』をめぐって」『東日本英学史研究』第16号，pp.20-32．日本英学史学会東日本支部.
_____（2021）「阿閉政太郎譯『會話体スウイントン氏初學入門及第壹讀本獨案内』（明治22年）をめぐって」『東日本英学史研究』第20号，pp.3-19．日本英学史学会東日本支部.
長井氏晸編・伊藤健三改訂（1987）『英語ニューハンドブック』第４版．東京：研究社.
平井法・高岸照子（1974）「高橋五郎」昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書　第39巻』pp.246-315．東京：昭和女子大学近代文化研究所.
町田俊昭（1981）『三代の辞書　英和・和英辞書百年小史』改訂版．東京：三省堂.
松村幹男（1997）『明治期英語教育研究』東京：辞游社.

（たけなか　たつのり・元香川大学）